

雪国の植物 ユキツバキ 26

胎内溪谷のブナーユキツバキ群落

石 沢 進

ブナーユキツバキ群落の保護を様々な形で呼びかけてきているが、十分な理解を得られないまま、時が過ぎている。

ブナーユキツバキ群落の素晴らしさに初めて接して感激したのが、奥胎内であり、その景観は忘れ難い。胎内流域には河岸段丘があり、その段丘の平坦な地形のところブナーユキツバキ群落が発達し、流域の下流部から上流部にかけて点々と分布していた。しかし、下流部から車道が奥地へ伸びるに従い、道路沿いのブナーユキツバキ群落が伐採され、その見事な景観が失われて、現在では下流部から国立公園の境界部分までの間では見るができなくなっている。国立公園に入ったところに胎内ヒュッテがあり、付近はテント場に改変されたので、その付近にあった素晴らしい群落は消失してしまった。テント場には、ユキツバキが生えていたことを示す証拠がないほどにブナ林の下を刈り払って整備し、ほとんど裸地状態にしたので、その姿が見られなくなっている。

●胎内ヒュッテ周辺は葉上苔の第一発見地

かつてこのテント場付近は中程に小川が流れており、その小川を塞ぐようにユキツバキが密生していて、中を歩くことも困難であった。小川沿いは湿度が高く、またブナで覆われているので、日の当たりが弱く年中多湿の状況に置かれていた。そのため、枝葉にコケが垂れ下がっていた。中でもユキツバキの葉の上に着生する葉上苔「ナカジマヒメクサリゴケ」が繁茂していることが、池上義信先生によって初めて発見された場所でもある。つまり、雪国のユキツバキに着く葉上苔の第一発見地であり、着生する量も極めて多かったところである。その後、しばらく現地を訪れる機会がなかったが、再度訪れた際、テント場に改変されてしまい随分がっかりした。このような場所こそ永久に保存すべき場所であったと思うが、今となっては取り返すこともできず大変残念な状況にある。

●新潟県ブナ林緊急調査：胎内地域のブナ林の位置付け

新潟県ブナ林緊急調査による胎内地域のブナ林は県内でも広域にブナ林が分布する代表的な地域で県内五カ所の内の一カ所に数えられている（新潟県 1987）。加えて広域にわたって下層にユキツバキが繁茂している地域は県内三カ所しかなく、胎内溪谷のブナ林はその内の一カ所であり、数少ないブナ林として位置付けられている。

そのような貴重な胎内溪谷のブナーユキツバキ群落の破壊は、ヒュッテ周辺だけでなく、その後もあとを絶たずに上流の頼母木川沿いに、さらに胎内川本流にまで及んでいる。頼母木川沿いの林道は、ユキツバキの群落を次々と分断してつけられており、極めて残念な状況にある。胎内川本流に造るダムのために、道路の拡張が進められて、さらに分断の幅は広がり、寂しい限りである。

飯豊山は森林生態系保護地域に指定されているが、ブナーユキツバキ群落が広く含まれていない。飯豊山麓のブナーユキツバキ群落が北に流れ下る胎内川や大石川などの流域に限られている。両河川とも下流部のブナーユキツバキ群落は、ダム造成によって消失している。森林生態系保護地域に指定されている際に、雪国を特徴づける群落であるので、その生育地を含めるよう強く要望したが聞き入れられなかった。当時の理由は、ダム建設の予定があるからとのことであった。飯豊山の森林生態系保護地域には、山頂部の森林の成立しない地域の面積が大きく、コアエリアと称する地域にはほとんど森林がなく、山体の周辺部のバッファゾーンと称する地域にブナ林があるものの、河岸段丘の見事なブナ林の所がほとんど含まれていない。したがって森林生態系保護地域内のブナーユキツバキ群落はわずかで、指定地域外に分布している。飯豊連峰の特色である森林、ブナーユキツバキ群落を含めないのは、この地域を生態系保護地域に指定する意義が薄くなるとの主張は採用されずに現在の指定地の設定となっている。

●水没するブナ林の救出

胎内川本流にダムが建設中であるが、そのダムが完成すると本流沿いの河川段丘に分布するブナーユキツバキ群落はすべて水没してしまう。そのような状況になれば、奥胎内のブナーユキツバキ群落の面積は、さらに大幅に縮小されることになり、この地域のブナ林の特色が失われてしまう。水を溜めない防災ダムならば、なんとか救われるので、関係各位にはご理解を頂き、今の群落の面積をなんとか守りたい。

●胎内ヒュッテに隣接する宿泊施設によるユキツバキの消失

胎内ヒュッテの近くに最近大型の宿泊所が建設中であり、その進行状況を見る機会があったので、その状況を写真で

紹介する。

前項でテント場周辺のユキツバキ群落の消失を記したが、この宿泊所の建設にあたって、またもやユキツバキ群落が縮小されてしまった。次から次へとブナ-ユキツバキ群落が無残に破壊されていくことを残念に感じている。なぜ、長い時代を経て成立している生態系の歴史をいとも簡単に破壊するのか、関係する人々の無知、無神経さに対して憤りの気持ちで一杯である。

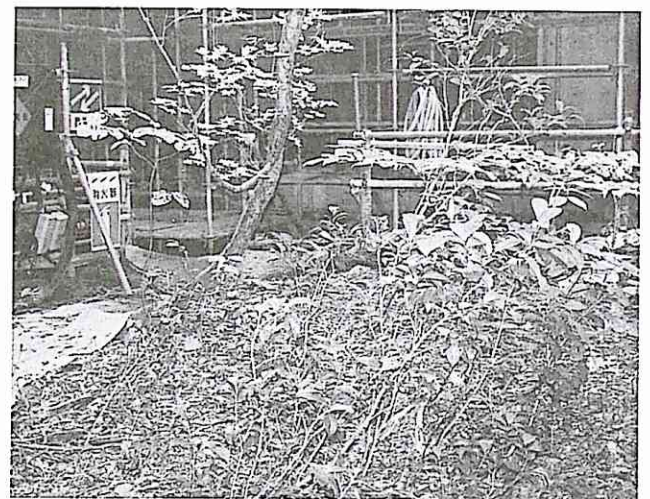
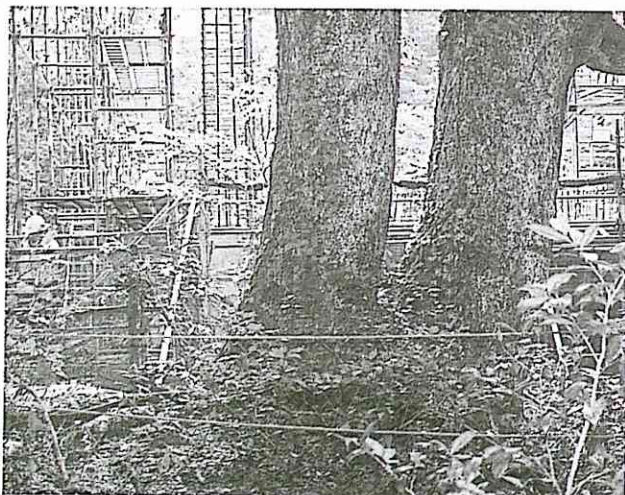
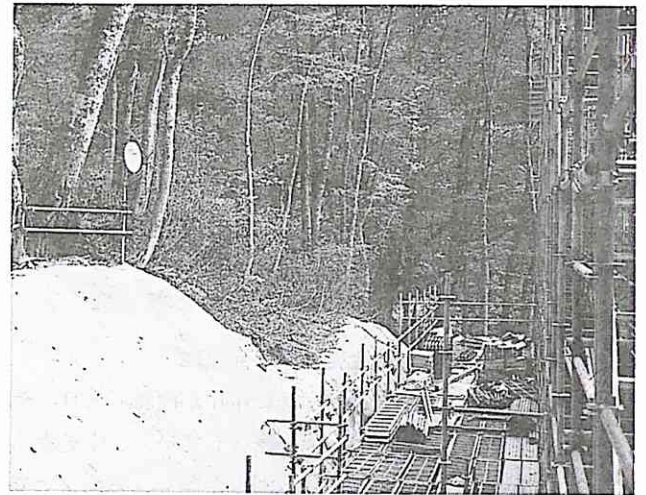
本誌でもしばしば指摘してきたが、県内におけるダムや道路の建設にあたっては、自然環境-生態系に十分に配慮した上で進めるべきである。これまでも建設に当たっては十分配慮していると、関係者が説明しているが、表面的である。例えば、建設に当たっては建設用重機の色はまわ

りの自然の色にあわせて配慮しているというようなことは、生態系の保護とは全く無縁なことで、配慮の観点が極めて表面的な代表例であろう。長い時代を経過して成立している自然の仕組みを壊すことのないような配慮であってほしい。広く関連する分野の多くの方々の意見を聞いた上で、着工に踏み切ることが肝要である。

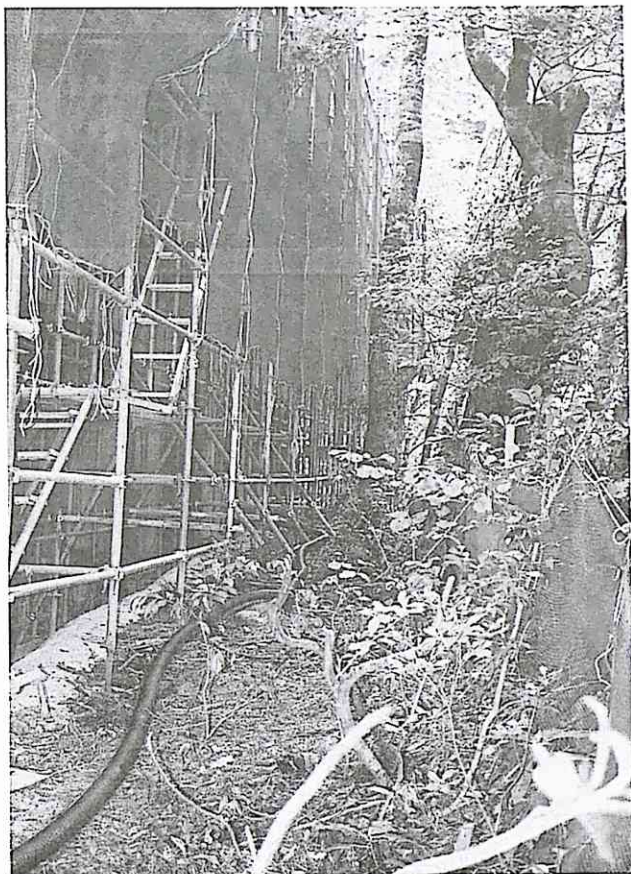
新潟県（1987）ブナ自然林保護対策緊急調査報告書

丸山吉夫	全県ブナ林の概要	6-13
松井 浩	ブナ林の種組成	14-17
丸山幸平	ブナ林の構造・動態および伐採と再生	21-23
石沢 進	ブナ林の植物相	24-30
〃	胎内川流域	79-83

(写真) ブナ林の中に建設中の胎内宿舎とダム建設現場



ブナ林の中に建設中の胎内宿舎 2003 9 19



ブナ林の中に建設中の胎内宿舎 2003 9 19



ダム建設現場 2003 7 6

新 潟 日 報

2003年(平成15年)8月12日(火曜日)

日報抄

棚田は地下水を養い、地滑りを防ぎ、森を守る。コメ作りの経済合理性だけでは計れない役割を果たしている▼日本の原風景といわれ、都市住民との交流の場としても注目されるようになった棚田に逆風が吹いている。棚田学会が三日に東京で開いた討論会「市町村合併で棚田はどうなる」で、全国町村会経済農林部長の牛島正美さんらは危機感をあらわにした▼「近くに役場があつて住民と一緒に取り組んでこられたからこそ、人口減、高齢化の中でも棚田が守られてきた」「合併で辺境化が進む棚田は、地域共通の課題としてとらえられなくなり荒廃が進む恐れが強い」▼長野県栄村の高橋彦芳村長の発言が印象に残った。「棚田は自治体と地域共同体が有機的に結び付かないと、水の管理すらうまくできない。両者の関係が強力になり、山間地域の自治機

能を充実させるのなら合併もよい」。合併論議で最初に押さえねばならぬ出発点であろう▼平成の合併論議は、人口の規模が先行している。広大な面積に市街地と山村部を抱えることになる合併後の自治体の行政効率を決してよくなるはず、きめの細かい農山村経営は一層困難になると、高橋村長はみる。異論もあるだろう。問題は、こうした論議を深めずに進む合併は禍根を残すということである▼南魚沼沢町の住民投票で合併反対が半数を超えた。上田欽一町長は「きめ細かな行政サービスが受けられなくなるといふ不安が大きかったのではないかと分析する。魚沼産コシヒカリの産地である塩沢町では全水田面積の約16%を棚田が占めている。山間部の農民はどんな思いで一票を投じたのだろうか。

1 総合 12版

(昭和16年7月30日第三種郵便物認可)

(日刊)

能を充実させるのなら合併もよい」。合併論議で最初に押さえねばならぬ出発点であろう▼平成の合併論議は、人口の規模が先行している。広大な面積に市街地と山村部を抱えることになる合併後の自治体の行政効率を決してよくなるはず、きめの細かい農山村経営は一層困難になると、高橋村長はみる。異論もあるだろう。問題は、こうした論議を深めずに進む合併は禍根を残すということである▼南魚沼沢町の住民投票で合併反対が半数を超えた。上田欽一町長は「きめ細かな行政サービスが受けられなくなるといふ不安が大きかったのではないかと分析する。魚沼産コシヒカリの産地である塩沢町では全水田面積の約16%を棚田が占めている。山間部の農民はどんな思いで一票を投じたのだろうか。